

戦後の昭和歌謡について《8》

山形 俊男 (昭和39年機械科卒)

●この1曲に賭けた戦後の歌謡歌手

(1) 《娘よ》 歌【芦屋雁之助】昭和59年

芸名で明らかのように関西出身の喜劇役者・芦屋雁之助が歌い150万枚の大ヒットになった「娘よ」である。作詞は北海道出身の大御所・高橋掬太郎に師事した鳥井実が、北原ミレイの「すすきのブルース」、森進一の「命かれても」などに続いて作詞したものである。芦屋雁之助は、昭和34年3月にスタートした毎日放送のコメディ番組「番頭はんと丁稚どん」で菓屋の番頭を演じ、一躍人気者になっていた。強面で、下の者に厳しい反面、裏に回ると大阪弁のおばちゃん口調で女性的な仕草を見せるキャラクターでウケを取ったのだ。39年、弟の小雁らと劇団「喜劇座」を旗揚げした時、座付き作家の藤本義一から、肥っていて、とぼけた風貌が画家の山下清に似ている事から舞台劇「裸の大將放浪記」を書き上げ、初演させていた。44年、劇団を解散して拠点を東京に移し、本格的な演技派俳優を目指し、51年、人気時代劇「必殺シリーズ」で、山田五十鈴と共演。更に森光子と共演した「おもしろい女」で芸術祭大賞を受賞、存在感を示した。

雁之助の一発大ヒットになる「娘よ」は父親の心境を滲(にじ)ませてしみじみと歌いあげ、59年にミリオンセラーを記録した。同年NHK紅白歌合戦に初出場。「娘よ」の大ヒットで雁之助は第26回日本レコード大賞特別賞、全日本有線放送最優秀新人賞、そして第10回日本演歌大賞特別賞などを受けている。



花嫁の父

(2) 《木綿のハンカチーフ》

歌【太田裕美】昭和50年

「木綿のハンカチーフ」は、大都会に出た男性と、田舎に残された女性との遠距離恋愛を対話形式の歌詞にしたコ

ニークなポップスである。男言葉と女言葉が交互に切り変わるという構成になっているが、このデュエットソングを太田裕美一人で歌い分けていた。

昭和50年12月に発売された裕美の3枚目のアルバム『心が風邪をひいた日』からシングルカットされたものだった。彼女は49年11月に松本隆 詞、筒美京平 曲、萩田光雄 編曲の「雨だれ」でデビューして以来、「たんぽぽ」「夕焼け」「木綿のハンカチーフ」「赤いハイヒール」「最後の一葉」「しあわせ未満」「恋愛遊戯」「九月の雨」「恋人たちの100の偽り」に至るまで、3年間に歌ったシングル全てが、このトリオで占められていた。作詩・作曲・編曲の顔ぶれと、歌った太田裕美が物語るように、彼女はアイドル歌手とニューミュージック・シンガーの中間的な存在に位置づけられ、育てられ、見事に花開いた歌手だった。デビュー当時のキャッチフレーズは“まごころ弾き語り”と言うもので、ピアノの弾き語り曲が多かった。

シングル盤3曲目の「木綿のハンカチーフ」の大ヒットで裕美は、NHK紅白歌合戦に51年から55年まで5回連続出場を果たすが、この間に歌った曲は、「木綿のハンカチーフ」「九月の雨」「ドール」「シングルガール」「南風-SOUTH WIND-」の5曲で、3回までが松本隆、筒美京平、「シングルガール」が阿木燿子 詞、宇崎竜童 曲、「南風」が網倉一也 詞・曲であった。



函館の夜景

(3) 《花街の母》 歌【金田たつえ】昭和48年

金田たつえが六年かけて歌い、全国的な大ヒットに仕上げた「花街の母」には彼女の人生を彷彿とさせる所があった。それだけに「この曲は必ず世に出したい」という決意があった。渋谷の三業地円山町で生きる女性の中には「花街の母」の歌詞そのままに、我が子を年の離れた妹と偽ったり、左妻(ひだりづま)稼業を続けるために、子どもを養女に出すケースが多かった。

たつえは、生まれて間もなく実父が死去したため、同じ北海道の砂川市に住む女性の元に養女に出された。貰われた先の養母は民謡の美声の芸妓だった。たつえは小

い時から、養母にみっちり民謡を仕込まれ、血は繋(つな)がっていないが、見事に歌いこなしていた。養母はそんなたつえに対して事有る毎(ごと)に、「お前がこんなに民謡を上手く歌えるのは、私の血を分けた子どもだからだよ」と話していた。物心がつく前に、養母の元に来たたつえは、その言葉を信じて疑わなかった。だが、高校の時、たまたま戸籍謄本を見る機会があり、自分が養女で有る事実を知り、頭をハンマーで殴られた様な衝撃を受けた。たつえは、養母にこの衝撃を話さないまま、昭和36年、日本民謡協会全国大会に出場し「江差追分」を歌って見事優勝を果たした。「私の血を分けた子供だからだよ」の偽りを裏切らないで養母に報いた。

昭和40年に上京、同年17歳で所属事務所の梶原亨と結婚。44年、「江州音頭」「河内音頭」で民謡歌手としてデビューしたが、地味な民謡が華々しくヒットする時代ではなかった。キングからコロムビアに移籍し、民謡を唄って見たが、やはり芽が出ず、演歌に河岸を変えた途端に、巡り会ったのが「花街の母」だった。

もず唱平が、大阪は北新地の小さなバーのマダムと、その妹と称する母子を知っていて、花柳界によくある実話を思い浮かべ作曲したのだった。作曲は三上敏に依頼されたが、三上は金田たつえの音域を超えた高い音域を使って曲をつけてしまった。メロディーは演歌のセオリーを踏んでいて、一度聴いたなら歌える曲になっていた。一方、当のたつえにとって自らの音域を超えた高音を使われていて、ステージで、この曲を歌えなかったらプロ歌手の名が廃(すた)る。何とか、歌いこなそうと苦勞する内に、「安易に裏声に逃げないで、振り絞る様に出す高音が、母子の悲しみを強調している様で、いい味が出ている」との、怪我の功名に近い評価を受けるようになった。たつえは「花街の母」をメインに歌う傍(かたわ)ら、「花街ぐらし」「雨の花びら」「花街三味線」「流転子守唄」「母恋子守唄」「おんなの灯」と「花街の母」に連なる歌を間断無く出して行った。

すると「花街の母」は徐々に動き始め、折からのカラオケブームと、舞踊レコードの注文と連動して、ヒットに結び付き、10数年間で250万枚のミリオンセラーに押し上げられた。そし



花街の新婚

て、昭和54年、第30回NHK紅白歌合戦に悲願とする初出場が出来た。「花街の母」の歌詞そのままの同題の映画も、東宝で制作され、金田たつえも芸名そのまま出演して歌っている。

(4) 《東京の灯よいつまでも》

歌【新川二郎】昭和39年

金沢ヘルスセンターで歌っているところを、村田英雄にスカウトされ上京。昭和37年に、キングから「君を慕いて」でデビューしたのが、新川二郎であった。石川県羽咋(はくい)町の出身で、デビューの時に公表された生年月日は、昭和17年11月2日と、3年もサバを読んでいた。実際は14年生まれである。

デビュー曲は話題にも上がらず、2年後の東京オリンピック開始2カ月前に発売されたのが、藤間哲郎 詞、佐伯としを 曲の「東京の灯よいつまでも」だった。雨の外苑、夜霧の日比谷、いとし羽田の、そして東京の灯と東京に関する地名はこれだけの、平凡な歌詞だった。しかし、春日八郎の歌った「あん時や土砂降り」、バーク佐竹の「ネオン川」など、数々のヒット曲を持った佐伯としをの、哀愁味を帯びた、非常に覚えやすいメロディーは新川二郎の唱法にぴったりでヒットした。彼は当時では破格の、年収400万円(現在の数千万円)を手に入れたと言う。新川はこのヒットにより、39年、第15回紅白歌合戦に初出場し、「東京の灯よいつまでも」を歌った。

日本中が東京オリンピックに沸いた所為(せい)もあって、この年の登場曲には、「東京」を冠した歌は「東京ブルース」西田佐知子、「さよなら東京」坂本九、「東京の灯よいつまでも」新川二郎と3曲リリースされたが、新川の「東京の灯よいつまでも」はその中でも圧巻で、彼は文字通りの「一発屋」だった。それ迄に石川県出身で紅白に出場した歌手は新川一人で、今でも懐メロ番組に時々顔を出している。



街路樹

信頼で夢をカタチに



株式会社

シブヤ建設工業

代表取締役 渋谷 守寿 (平6上)

〒010-0802 秋田市外旭川字三後田266-1 TEL 018-868-0655 FAX 018-868-0659

安心・安全な災害に強い街づくり

総合建設業



旭建設株式会社

代表取締役 渡辺 憲介

秋田市将軍野南四丁目8-25 TEL018(845)1197代 FAX018(845)2580